

面金は武道具製造業者が自社でつくっていない部分で、すべての業者が専門の金属加工業者に依頼している。そして現在日本で面金を製造しているのは三社だけだ。今回は川辺さんの案内で、その一つである真和工業株式会社を訪ねた。隣の燕市とともに金属加工の町として知られる新潟県三条市にあり、初めてチタンの面金を作った会社である。

現在、商品として売られている面金の材質はジュラルミンが主で、他にチタンがある。

「ジュラルミンがおそらく9割、チタンは1割ぐらいでしょう。チタンは壊れないから買い替え需要が起きないということもあります。感覚としては、スプーンを折るように金属の板を何度も折り返すと、ジュラルミンが3回か4回で二つに割れるのに対しチタンは10回やっても割れないときがある、というぐらい強度が違います。剣道の面金はそれだけではなくいろいろな要素があって、竹刀で叩かれたり、ぶつかった振動もありますが、それらを総合しても壊れにくいのはチタンになるでしょうね」

と親和工業代表取締役の長谷川暢彦さんは話す。チタンは元素の一つ、つまりチタンという金属である。一方のジュラルミンとはアルミニウムと銅、マグネシウムなどによる合金だが、その配合や処理によって多くの種類がある。長谷川さんの父である治司さんが、何十種類ものジュラルミンの丸棒を取り寄せ、曲げたり折ったりのテストをして選んだものが現在使っている材料だという。

面金の製造工程については次回以降に譲り、今回は創業者である治司さんの話を中心に、

日本でつくる 剣道具

—— 剣道具の製造工程、すべて見せます

第8回 面金製造業者は三社だけしかない

面金の進化の歴史をざっとたどってみることにする。

航空機のみに使われていた チタンを初めて採用

昭和13年に三条市で生まれ今年79歳になる治司さんは、剣道経験者だ。終戦時は小学1年生で、中学に入ってから1〜2年が経ってから剣道が復活してできるようになり、三条武徳殿で剣道を始めた。進学した商業高校にはまだ剣道部がなく、校長に直談判して同好会を立ち上げたそう。

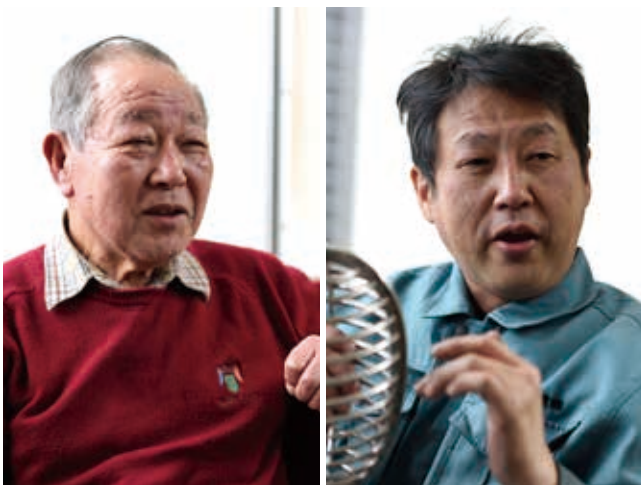
卒業後は東京、そして新潟の企業で經理の仕事をしてきたが、結婚し長男暢彦さんが生まれて間もなく、三条市に帰ってきて独立する。夫人の実家の家業が金属加工で、親戚に馬の轡を作っている会社があり、その仕事をさせてもらったが、事業を拡大するため三条市の中心部からややはずれた現在地に土地を買って移った。

轡のほかに眼鏡のフレームをつくり始めたが、そんな時に知り合いが、治司さんが剣道経験者であることを聞き、つくった面金を持って訪ねてきて、一緒に面金づくりの仕事をし

ようという話を持ちかけた。しかしその面金は角が出っ張っていて一発で面紐が切れてしまふようなものだった。剣道を知っている治司さんは見た瞬間にそれが分かった。

「その人は剣道を知らないからこんな面をつ

真和工業代表取締役の長谷川暢彦さん(右)と、
創業者である父・治司さん



撮影＝窪田正仁

案内人 川辺尚彦

(株)全日本武道具、
(株)日本剣道具製作所代表取締役



くったのだらうと思いました。私ならこうする、ああするというのが見た瞬間分かったのだ、悪いけれどもあなたのお手伝いはできませんと断り、自分でつくってみました。最初は鉄でつくりましたが、本気でやるならチタンだなと思ったんです。燕ではステンレスの加工が主だったのですが、ステンレスではなくチタンだと思いました(治司さん)

それはなぜか。昭和44年(1969)にアメリカが初めて月に有人宇宙船を着陸させたが、それを特集したテレビ番組を見てみると、宇宙船にチタン、マグネシウム合金、セラミックスが使われていることを盛んに言っていたからだ。しかし、当時三条ではどこで聞いてもチタンが入手できなかった。それもそのはずで、当時チタンはまだ航空機などにしか使われていなかったのである。そこで東京に何度も出張して、ようやくチタンの材料を供給してくれる大同特殊鋼という会社を見つけた。「最初に10個分の材料を分けてもらって、8

個手づくりで面金をつくりました。そしてその会社を持っていったら、これはうちで供給した材料と違うというんです。それは私が鏡面研磨をしたからです。チタンを磨くとそんなに光るなんて、その人たちも知らなかった。

世界で初めて私がやったんです」(治司さん)
この鏡面研磨は燕や三条の独特の技術であるという。工場で鏡面研磨の作業とその前後の面金を見せてもらったが、確かに驚くほど光沢が違う。



真和工業の工場には高いところに多数の面金が並んで吊るされていた。よく見ると面金少しずつ移動している。その仕組みについては次号以降で紹介する



手前が鏡面研磨を施した面金で、奥が元の状態(写真はジュラルミン製面金)。同じ材質とは思えないほど光沢が出ている

新しい材質を工夫し 見えない面で進化してきたが

面金の歴史をたどってみると、最初は鉄でつくられており、下部が錆びやすいので下の3本の横ひごを真鍮にしたものが生まれ(すべて真鍮のものもあった)、その後洋銀が一般的となった。そして現在のジュラルミン、チタンの時代となるが、その前にステンレスの面金なども生まれている。

大雑把に重量を比較すると、成人用のもので鉄が600g弱、洋銀はそれより重く600g強であるのに対し、チタンが350g前後、ジュラルミンが300g弱と大きな違いがある。ジュラルミンは鉄のほぼ半分だ。

現在は、横ひごの上の二本だけチタンであるジュラルミンというものもある。川辺さんの全日本武道具ではいち早くその仕様の面金を採用した。他社製では上二本が鉄であとはジュラルミンという仕様もある。

ジュラルミンやチタンの面金が普及してくるにつれ、それまで全国で十社以上あった面金をつくっていた会社が徐々に撤退していき、やがて現在の三社という状況になった。金属の町である燕や三条には元から他に面金業者はなく、現在ある他の二社は大阪である。

「父が金型で大量生産するようになり、そういう技術に追いつかないところをやめていったわけです。現在うちでは機械による大量生産の部分と手づくりが半々といったところでしょうか。一番多いときには年間15万個うちだけでつくっていたらしいですが、現在は当時の5分の1ほどで、父や母、妻も含め社員5人と忙しいときにパートに1人来てもらってまかなえる量です」(長谷川暢彦さん)

現在、真和工業では面金のみならず、剣道の打ち込み台や空手の防具、まったく畑違いの給食用品なども製造している。面金は三社合わせても15万よりはるかに少ない数だという。そして、海外でも面金づくりに取り組んだところはあったが、技術の壁をクリアできず現在はすべてが日本製だそう。

材料の変化を見ても、後述するようにその他の点でも面金は進化し続けてきたといえる。しかし長谷川さんにとっては、空手の防具や給食用品などが常に材料を探し実験をして、新たな要望に応えるものをつくらなければならぬのに比べれば、剣道の面金は進化がないそう。工夫を加えても見かけが大きく変わると認められないので難しいという。

繰り返しになるが、貴重な面金製造の技術を持っているのは日本に三社だけしかない。「三社だけで剣道文化を支えているんですよ」と川辺さんは言う。